落とし物拾い物

里村橙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落とし物拾い物

【Ｎコード】
Ｎ３７０２Ｐ

【作者名】
里村橙子

【あらすじ】
どこかで落としたどこかで拾った
小さなお話をいたしましょう。

心の機微と人生の不思議を
ほんの少しだけ
顔を見合わせるように。

夢うつし

三歳になる娘のほのかが悪夢にうなされて夜中にしばしば起きるようになったのは、ここ一ヶ月のことだった。どうやら毎回同じ夢をみるようだ。夜泣きの原因は昼間の運動量が足りないためだろうかと、外遊びを多めにさせ、先週の日曜日には妻と三人で海水浴にも出かけた。疲れきったほのかは爆睡したので確かに効果があったのだが、お盆休みの初日に妻の実家で夜更けに泣かれては、案の定、おおごとになってしまう。

「血縁者なら効く薬だ。俺が飲んでもいいが、哲夫さん、やってみるかね」

義父は醸造会社の研究所で勤めるかたわら独学で薬事法を学び、退職後は自宅を改築して義母とともに小さな薬店を営んでいる。人付き合いがまるで駄目な義父なのに客商売に転じたのは、ひとえに義母の人柄をあてにしてのことだろう。しかし第二の人生にむけて一念発起し、ご近所づきあいの延長と立地のよさで、そこそこ固定客もついているからたいしたものである。

おかげで帰省中のちょっとした発熱や腹下しなどは、義父がうってつけの薬を出してくれるので助かっていた。しかし、この薬は何だろう。ほのかに飲ませるのならわかるが、私に飲めと言わなかったか。

黒いキャップのついた茶色の小瓶には漢字ばかりのラベルが貼ってあった。「これ、売薬ですか？」と尋ねながら思わず手にとる。

「漢方のエキス剤だよ。この頃は意外と漢方が効く。先月も何歳だったかな、女の子が夜泣きだといって親御さんが来てね。一晩でよ

く効いたそうだよ。哲夫さんがいやなら雪枝でもいいんだ、雪枝、雪枝」

「いやだ、お父さんったら。大丈夫なの？　怖い夢は伝染したら治る、なんて。迷信としか思えないわ」

妻は肉親だから言いたいことが言えるが、こちらはそうもいかない。においを嗅いだら、コアントローに正露丸とゆで卵を溶かしこんだような複雑な香りがして、ふと酔い心地になった。「面白いじゃないですか、今夜早速試してみましょう」口をついて答えてしまってから軽口めいていなかったかと思う。なのに「でもおとうさん、目が覚めたらバクにはならないでしょうね？」と、さらに軽さを上乗せする形でためらってみせたが、「それならわたしが許さないわ」という妻のひとことで一蹴（いっしゅう）されてしまった。私も夏休み気分には違いない。

催眠剤の一種なのだろう、服薬してまもなく涙がでるようなあくびが数回、そのうちぐらんと目がまわるような感覚を覚え、頭の後方に意識がもっていかれた。どれくらい無を感じていただろうか。気付いたら私は、三歳のほのかがみていた、夢のなかにいた。

私は自分のマンションにいた。ほのかはいない。夢の肩代わりをしているのだから、私が、幼いほのかの役をしているのだった。

お昼寝から起きたらママがいない。寝すぎたのかもう室内が薄暗く、独り聞き耳をたてる。窓の向こうの中庭あたりからママたちの笑い声がした。ああ、コープさんが来るのかな。楽しそうだな、ママのところに行きたい、と思うのに体がびくともしない。悪寒が走った。怖い。怖いものがいる。

あかりのついていない部屋の壁を夕焼けが紅く染めはじめている。台所のほうが暗い。さらに奥にあるお風呂場がなんだか黒い。あそ

こだ。あそこにお化けがいる。へのへのもへじのお化けが。

ほのかの恐怖を、いま私は体感している。何度も繰り返し見た夢だからだろうか、視界の届かない台所の隅やまだ登場していないお化けの顔が思い描ける。それはあまりに不気味だった。

へのへのもへじの顔面は、単純な線だからこそなおさら、目の動き、口の動きに微妙な変化が浮かび上がるかのようだ。黒々と禍々(まがまが)しい気配が、金縛りにあった幼い私をじらすかのように、じわりじわりと身に迫ってくる。なすすべもなく窓の外の夕空が刻々と紫色に変化するのを眺めていると、ついにへのへのもへじのお化けが私の眼前に姿を現す。万事休すか。

次の瞬間、私は全速力で走っていた。ああ、逃げている。相手はもうへのへのもへじではない。なぜなんだろう。脈絡がないのが、夢だ。と頭ではわかっているが、逃げる恐怖を体感しつつ、幼いほのかの内側をそのまま表しているような様相に、ただただ目をみはっていた。

世界は、パステルカラーだった。ピンクや淡い紫色や水色のマーガレット型の平面的な花が、貼り付けられたように一面に広がっている。同時に夢は、花畑の真ん中を懸命に走っている一人の少女を、パノラマで映し出しもする。姿を隠した追っ手の気配はむやみに恐怖をあおり、少しでも速度を緩めれば背中をかすめそうだ。逃げなきゃ。早く逃げなきゃ。

行く手にトンネルの入り口が見えたので一心に走りこんでいくと、その内側は合掌造りのような日本家屋となっていた。日本昔話の世界だ。突然、自分は猿。さるかに合戦の猿になったんだ、との自覚が閃き、日本間から土間へ抜けて軒下へ出たとたん、ドスン、と背中に衝撃が走る。

重たいものに地面にうつぶせに倒されて、私は押しつぶされていた。おとぎ話では石臼のはずだが、生命反応もない無機質な衝撃と

鈍痛であるのが無性に悲しい。痛い。怖いよ。小さなほのかには最大級の嘆きと痛みがじかに伝わってくる。ほのかはこらしめられたんだ、きっとすごく悪いことをしたんだ、だからこんな目にあうんだ。わあわあと大声をあげて泣きじゃくりたいのに、泣けるだけの落ち着く隙を夢は与えてはくれない。いつのまにか重石がとれていて、気付けばお花畑のパステルカラーの真ん中に戻っていたのだった。それからは今みた光景が延々と展開される。お花畑、さるかに、ドスン、お花畑、さるかに、ドスン。永遠に繰り返す恐怖と痛みとパステルカラー。

ほのかが大泣きして起きる理由がわかった。見える世界は子供らしいあどけなさに満ちているけれども、永遠にさいなまれる罪と罰。言うなれば地獄。それは、こんなに小さなほのかでも、あるいは誰でも、本能的に持っている恐れなのかもしれない。

「ほのかー。パパ起こしてあげて」「はあい」

足元のさらに向こうから愛する二人の声がする。ああ、生きて戻れたみたいだな。

ほのかが近づいてきて、私の頬にぺたんと吸い付くようにすべすべの紅葉の手をあてた。片目だけ開けてみる。「パパぁ、朝ですよう」ほのかの手に触れた自分の手は獣ではなかった。よかった。バクにはなっていなかったようだ。

朝食後、照れくさいので妻には何も言わず、義父にこっそり報告をした。

「ほのかの夢、ちゃんとみれましたよ。ずいぶんと怖い夢をみていたようです。これでほのかは大丈夫なんですよね」

「おお、それは良かった。もう悪夢はみないから安心なさい。で、その夢は、へのへのもへじとさるかに合戦だったかな」

そしてあの薬は実は売り物ではなく、先祖伝来の秘薬だと明かしてくれた。「雪枝はもっと小さかったからなあ。まったくおかしな夢だったよ」と言って、義父は庭に出て花に水やりをしている妻を目で追いながら、懐かしむように目を細めた。

直感

「さあ、次は見つめ合った状態でリラックスしてみてください」

会社から命じられたのは「メンタルヘルス研修」だった。形ばかりの労災対策とはいえ、昇進したばかりの他支店の課長が心療内科通いで長期休暇をとったらしい。入社五年目の結花にお鉢が回ってくるのは、疲れて見えたのか暇そうに見えたのか。査定を気にしつつ地下鉄に揺られ、定刻に間に合うよう機械的に体を運んだが、立地からして陰気なビルの一室は、結花の気分を一層萎えさせた。ストレス解消法を説く講師は声が大きいだけで場末の興行主のようだし、集まった参加者も一様に精彩を欠いてみえる。

プロジェクタを使った講義が終ると、自己紹介をかねた発表をさせられた。第二部はリラックス法の実践だという。机が片付けられ、発声練習や肩まわしのトレーニングのあと、メンバーチェンジで列を移動した。

新たに対面した相手は、柔和な印象の四十半ばの男だ。細かいチェック地のスーツはくたびれた風合いではあるが、結花が目線を上げるほどの上背はある。

「もう一歩近づいて。そう。目をそらさないでいられますか。リラックスして」

講師のかけ声を合図に、男の眉根に寄せられていた力がほどけた。結花は昔から目をあわせることに苦痛はない。余裕で相手を見返した。

「お互いをありのままに受け入れあうのが自然の姿です。意地悪く観察してはいけませんよ。さあ肩の力を抜いて」

観察しないでいるのはさすがに難しい。無表情に？　いやフレンドリーに？　戸惑いながらもいまは不自然なトレーニングに身を委ねるほかない。目の前の男は講師の指示通り、肩まで力を抜いたようだった。真面目な性質（たち）なのだろう。しかし同年代でもダンディで世事に長けた結花の部長とは違い、この男に華やかさはなかった。

「右手を相手の肩に置いてください。信頼が通うのを実感して」

無意識にも彼女の瞳は慈愛の色を帯びていたかもしれない。肩に温かい体温を感じて、真面目な男は目じりを更に下げる。直感的に、結花の頭に閃くものがあった。わたし、この人の奥さんに似ているに違いないわ。

後半のプログラムがおざなりになるほどに、その閃きを確かめたい衝動は収まらなかった。解散時刻を迎え、親しくなった一部の人間が飲みに行こうと言葉を交わす間を縫って、結花は目で男を捜した。

幸いエレベーター横の自販機で茶を買う男を認めた。会釈をしながら結花も急いで缶コーヒーを買う。

「この研修、喉渇きましたよね。このまま帰られるんですか？」

さりげなく話しかけた結花を見て、男はにこにこしている。開放的なトレーニングの成果で警戒心が見られない。いよいよ本題だ。

「あのう、もしかしてわたしって、奥様にちょっと似ていたりします？」

「ああ、わかります？　そうなんですよ不思議ですねえ」

相手はいかにも嬉しそうに顔をほころばせた。それを見た結花は、予想もしなかった感情が湧き起こるのを感じて、心底びっくりした。

その感情の正体は、不快だったのだ。直感はあたった、思った通りだった、でも身にまとわりつく親しみが、もうびっくりするほど不快だったのだ。ビル前で男に別れを告げて、結花は並木道を早足で歩く。

きっとやさしい奥さんだろう。綺麗かもしれない。あの人はいい人だ。でも不快だ、絶対に嫌だ。

その連想は、きっとしてはいけない連想だよ。荒ぶる胸のうちでそう断じながら、結花はパンプスの踵をわざとコツコツ鳴らしながら歩いた。

――誰かに似ているという連想はいけないことだろうか。

地下鉄沿線の地上に延びるアーケード街を過ぎ、ファッションビルと飲食店が並ぶ中心地まで来た結花は、いつしか不快の衣を脱ぎ捨てていた。結花にも好きな男がいた。手に負えないと諦めて自分から手放した恋だから、合わせる顔などない。それでも、まとわりつくなら彼、いや、彼のようでなくてはならない。

「あれ、もしかして翡翠さん？」

誰かが結花をネットのハンドル名で呼んでいる。反射的に先日オフ会に参加した顔ぶれを探すが見あたらない。すると前を塞ぐようにしてひょろ高い人物が立った。

「わは、初めまして！　しのぶです」

「ええっしのちゃん？　しのちゃんなの？」

「千夏さんにオフ会の画像もらってたんですよ。はあ良かった、人

違いじゃなくて」

四つ年下のしのぶは、ネットでも人気者だった。明るく乗せ上手で返事をまめにつけていた。時折近寄りがたいほどの孤独な呟きをアップすることもある。若いのに発言に深みがあり、決して愚痴を書かない潔さが、結花は好きだった。

現実のしのぶはイメージに違わぬ容姿だ。いや、改めて眺めると想像以上に整っていた。彫りの深い顔立ちにモデルのように長い手足。中性的なパンツスタイルがよく似合っている。

「やだあ、しのちゃん、かっこいいよ。女子高でもてたっていう噂、嘘じゃなかったね」

後方からスピードを出した車が通り過ぎ、とっさにしのぶが結花を内側にかばった。以前バーチャルで楽しんだ「騎士」役そのままのしのぶの行動に結花は喜んだ。「当然です同一人物ですから」と照れながらしのぶが答えると、オンラインの親密さが一気に現実に降りてきた。

人気のビアガーデンに行き着く前には互いに本名を明かした。なんとしのぶは本名をハンドルにしていた。会えた偶然を祝って上気した顔で乾杯する。とくに結花は頬骨が高い位置に上がりっぱなしで、飲み始めるとさらに饒舌になった。さっきの研修のこと、ネット仲間のこと、いつか書き込んだ恋のこと――。

ふいにしのぶが顔を寄せて「結花さん？」と語尾をあげて呼びかけた。首元からよい香りがする。落ち着いたしのぶの地声は、耳に心地よくセクシーだった。

「その話は前にも聞いたし、いまも自分は一生懸命ちゃんと聞きました。だから、悲しい話は今日でおしまいにしましょう。ね、結花さん」

一瞬、愚痴を叱責されたと受け取って、結花はしのぶの目を覗き込んだ。しのぶは笑っていなかった。長い睫毛が縁取った瞳の色に、底知れない虚無を感じた。そうか、そうなのか。年下だからと何を言っても経験不足かハッタリだと思っていたが、それは誤りかもしれない。

背筋に走る驚きの次に感じ取ったのは、悲しみを補おうとして培われた優しさだった。知っている。わたしはこの優しさを知っている。

「駄目だなあ、結花さんは。泣くのは時間がもったいないですよ？ほら」

わかったよ、しのちゃんが言ってくれるんだからもう悲しまないよ。慌てて結花の頬にハンカチを当てるしのぶに、あふれる思いのまま微笑み返す。結花の年上の面目はまるつぶれだったが、親友を見つけたような感動に、いまは浸っていたかった。

打ち上げ花火

「ある種爆弾だよね」

会場のアナウンスが告げる着火前の玉の大きさ、そして重量に感嘆して月子が言った。

そう、華麗なる爆発は夏の風物詩。例年高校時代の仲間と自転車で落ち合って、河原のサイクリングロードで好き勝手に酒盛りをするのが定番だった敦士だが、今年は奮発して至近距離の有料観覧席のチケットを押さえた。月子と付き合い始めたし、たまたま広報誌をみていたからラッキーだったと敦士は照れたが、胸のなかにはもうひとつの思いがあった。

春に敦士の祖母が他界した。街道ぞいの旅籠から料理屋へと変わった家の長女であった祖母は、幼い頃からその日は親戚縁者を集めてのもてなしに忙しかったと言う。その催しは祖母の弟である料理屋の主が十年前に亡くなるまで続いていたから、幼い敦士も親族の大人たちに紛れてご相伴に預かった記憶がある。

「あの大きな音を聞くともうな、お祖母ちゃんじっとしていられんのよ。あっちゃん真下に行ってみられ。ええよ」

節くれだった指が見舞いに来た敦士の手を意外と強い力で握ったのは、昨年夏、祖母の住む町でテレビ中継があった翌日のことだった。

「お祖母ちゃんこそまた見に行けばええが。来年は俺が連れて行くけえ」

あの頃すでにもう長くはないと伯母から聞かされていたから、出任せで口走ったのだが後悔はしていない。感傷になど浸りたくない。あの祖母を夢中にさせた間近の臨場感というものを知りたいだけなのだと反芻して、敦士は前を見る。やがて一発で空を明るく照らした打ち上げ花火は、まさに職人技の賜物だった。この一瞬のために心血を注がれた大きな大きな瞬き。バラバラと豆を撒いたような音とともに、色とりどりの火の粉が明滅しながら頭上に落ちてくる。シュルシュルと垂直に打ち上げられては弾け、またひとつ上がっては弾ける。間近だからこそじかに胸を揺るがせる破裂音は、大太鼓の暢気さではなく、月子の言うとおり、鉄の砲台を思わせた。

高揚して敦士の手を引き寄せて握ったのは月子の白い手だ。

「めちゃくちゃ大きい」

黄色い声を張り上げた彼女の瞳にさまざまに彩られた灯が映って見える。敦士は嬉しくなって顔をくしゃくしゃにして笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3702p/

落とし物拾い物

2010年12月25日01時03分発行